

のかかわるものの何であるかの究明を通じて開示されてくる筈だということも著者はすでに熟知しておられるのではなからうか。自然と超自然の秩序を始めから分断し、階層化することが、今日、哲学にせよ、神学にせよ、思索の生命を枯渇させることになるのは目に見えている。合理と神秘が接続する上昇の道にアウグスティヌスの存在の思索が定位している所にその魅力はある。このアウグスティヌスの思索に息吹かれて、トマスの思索をどのように生きたものとして著者が呈示してくれるのか、著者の力作の続刊が待たれる。

トマス七百周年を記念する諸論文集

フランシスコ・ペレス

周知のように、トマス没後七百周年を記念して世界中多くの催しがあったわけであるが、この関係でまた多くの出版物が刊行されてきた。それらによって種々の問題に新しい光が当てられ、その理解が深められてきたことは、七百周年の喜ばしい一つの結果であるが、それよりもっと広い収穫は、これらの刊行物が可能にしてくれた全体的な展望そのものであろう。それは、ちょうど聖職者の教育におけるトマスの従来位置が大いに疑問視されている時代であるからこそ、興味のあるものなのである。そして最近刊行されてきた諸論文集は、トマス研究の熱意がなくなっていないことを明らかに示している。一人の研究家だけの著書もあり、また学術雑誌に散見する多くの論文もあるが、ここでは論文集という類のものに限って述べることにしたい。それは二種類のものであって、一つは学術雑誌の特集号であり、もう一つは独立した記念論文集として企画されたものである。

後者の一例は、我国で刊行された『トマス・アクィナス研究——没後七百年記念論文集——』（松本正夫・門脇佳吉・K・リーゼンフーバー編、創文社、昭和50年、519ページ）であるが、それは海外のものとは比べても恥しくない我国のトマス研究の成果である。それについての詳細な紹介は要らないであろうが、もっとも一般的な点についてだけ簡単にふれておきたい。我国では今までトマスが主に哲学者とし

て研究されてきたので、編集者は積極的に神学者としての側面をも明らかに示すように努めた。またトマスを思想史的に把えようとして、他の思想との比較研究を多く収録したのであり、あるものはもっと古い思想と、あるものはもっと新しいそれと、またあるものは同時代の思想との比較を行なっている。さらにいくつかの研究は直接それぞれの問題を論じている、または、現代思想との関係を明らかにしようとしている。細かいことについての評価はともかくとして、この論文集全体は、我国でもトマスが広く研究されていることを明らかに示している。

海外のものの中で一番はじめに紹介しなければならないと思うものは、*St. Thomas Aquinas 1274-1974 Commemorative Studies*, Pontifical Institute of Medieval Studies, (Toronto) (Vol. I: 488 pp., Vol. II: 526 pp., 1974) である。序文は Gilson が書いたものであり、収録されている35の論文はカナダ内外の学者によるものである。過半数の論文は英語で、三分の一はフランス語である。残りはドイツ語(2)とイタリア語(1)である。Gilson 自身は序文のためにも論文のためにも英語を使っている。序文の中でかれは、この論文集の目次を見ただけでも読者が、トマスという一神学者の驚くべき広い関心の多面性を容易に感じるであろうと指摘しており、それよりもさらに大切な特徴として、方法や扱い方の多様性と、問題の性質に応じてトマスが使用する原理の柔軟性を強調している。実在の多様性を尊重する方法論として Gilson はこの点を高く評価しており、デカルト的なやり方に対比させている。この二巻に収録された論文は七つのグループに分類されている。第一はトマス伝についてであって、二つの論文しか含まないが、その中の一つは著名な Walz 師のものである。著作についてのものを集めている二番目のグループは四つの論文を含んでいる。三番目は、解釈の諸問題についてであって、Gilson, Congar, Geiger 等の研究がそこに見いだされる。一番多くの論文を集めているのは、トマス以前の思想との関係を扱っている第四のグループである。その中にアラビア思想に関するものが三つあり、Gardet や Anawati のような専門家によるものである。五番目のグループには、トマスの同時代人に対する関係を扱う六つの論文が見いだされ、一つはトマスとボナヴェントゥラとの比較研究である。最後の二グループは、後世に対するトマスの影響についてであって、中には Chenu, Fabro, Lakebrink や Mascall のものがある。

第二に紹介したい海外の論文集は、*Walderberger Studien-Philosophische Reihe*の第五巻として刊行された *Thomas von Aquino. Interpretation und Rezeption. Studien und Texte*, herausgegeben von W. P. Eckert O. P. (Matthias-Grünenwald-Verlag, Mainz, 1974, 980 SS.) である。その中に収録されている論文の数は29にのぼり、26はドイツ語で、一つはスペイン語、一つはオランダ語、一つはフランス語である。思想史的な面を重視するのが編集の一般的な方針であり、哲学的な問題と神学的な問題とに分けないで、ただ扱っている問題に従って論文の順序を決めただけである。そして編集者の目的は、新しい問題との対決を媒介として、トマスから受け継いでいるものの妥当性を改めて確認するということである。思想史的には編集者は、トマス固有のものを正確に把える必要があると考え、時代の一般的なものを直ちに「トマスの」と見なさないように警戒している。かれらによれば、信仰と学とのかれなりの総合こそトマスのものであって、トマスの反対者が一番強く疑問にしたのもちょうどこの点である。しかし面白いことは、当時のラテン・ヨーロッパで、あれだけ議論されていたこの総合の魅力を感じたのがビザンティン世界の人々やスペインとイタリアのユダヤ人であったということである。編集者はこの点を指摘し、それに関する二つの論文を収録している。また未刊行のある文献がここに発表されており、最後の研究すなわちトマス肖像画についての論文は比較的に知られていないものの複製を多く含んでいる。

規模のもっと小さいものとして、まず、*Thomas von Aquin 1274-1974* (Hrsg. L. Oeing-Hanhoff, Kösel-Verlag, München 1974, 174 SS.) というのがあるが、編集者の意図は、いわゆる Schulthomismus が終わった後でも、トマスとの対話の実りが豊かであることを示そうとすることである。全部で七つの論文がここに収録されており、プロテスタントの間でトマス研究に対する新しい熱意が見られるという点が強調されている。ちょうど最初のもの (Ulrich Kühn, "Thomas von Aquin und die evangelische Theologie") と最後のもの (Jörg Baur, "Fragen eines evangelischen Theologen an Thomas von Aquin") は、プロテスタントの学者によるのである。その他にはいくつかの歴史的な研究があり、また、神学の研究におけるトマスの意義を強調する K. Rahner の論文と、被造物の実在性をよく弁護したのものとしてトマスを非常に高く評価している J. Pieper の論文がある。また、次に紹介するもう

一つの論文集の編集者である Kluxen もこの論文集に寄稿している。

Kluxen の編集したのは、*Thomas von Aquin im philosophischen Gespräch* (Verlag Karl Alber, Freiburg: München 1975, 291 SS.) であり、それは、七百周年という外的状況をともかくとして、トマス思想それ自体の意義を問題にしようとするのである。この論文集は、性質のずいぶん違う二つの部分からなっている。第一部分は、いくつかの国の研究者が書いた論文を集めている。ただしすべての論文はドイツ語で発表されている。そのあいだには著者や主題によるさまざまな相違があるが、主として問題を哲学的に論じているという共通の特徴があり、なんらかの仕方ですべての論文は、現代人がぶつかっている諸問題のために参考になるものとして、トマスを研究している。そのために、まず、われわれの実際の対話者として歴史上のトマスを正確に把えるように努め、その思想をよく吟味したり熟慮したりすることによって、その中に含まれている不朽の真理を現代人のために救おうとするのである。具体的には、Kluxen は、トマスが開いてくれた哲学的思考の見通しについての方法論的な考察を述べており、Lakebrink は、先験的トマス解釈に対してかれなりの解釈を弁護しており、Verbeke は、認識論のある問題に関して、Louvain 学派の立場を主張している。最後の論文は別の論文集にフランス語で収録されているが、それについては後にふれる。その他にまた、分析哲学と関係のある二つの論文がこの第一部に含まれている。第二部は、「トマス・アクィナスと中世における哲学概念」についてのセミナーの記録である。トマスについての部分は、Kluxen 自身のものであり、その他の参加者は、エリウゲナとその時代とか、アルベルトゥス・マグヌスとアリストテレス受容とか、オーヴェルニュのギョームとか、ドゥンス・スコトゥスとか、オッカムとかについて論じている。各人は、まず、自分の研究したテーマについて発表し、最後にまた、同じ順序で、自分の研究の立場からトマスについての批評を行なっている。トマスの考えが画期的であったという点に関しては意見の相違はなかったそうである。

次に、哲学雑誌の特集号についてであるが、まず、*Salzburger Jahrbuch für Philosophie* は *Gedenkband zu Ehren des hl. Thomas von Aquin (1274-1974)* という題の特集号を刊行している。なぜこの特集号をつくったかについて編集者が述べているが、それは、現代においてもトマスが哲学的にも神学的にも有意義な思想家であ

ると確信しているからである。さて、歴史上の研究の重要性を編集者は認めているが、それだけでは不十分であると考えており、トマスを通して真理を問題にしておくことこそ大事であるという。いいかえれば、トマス自身がとった態度をわれわれもまたとらなければならないというわけである。というのは、知ることのできたあらゆる思想との対決の際、トマス自身は、歴史の中で主張されてきた「この人あの人の意見」よりも常に「ことがら自体の真理」を第一の関心事にしているからである。だから、“*unice veritatis amator*” という言葉にトマスの模範的な姿がよく表わされていると編集者は考えている。360ページのこの特集号には、ドイツ語で書かれた13の論文が収録されている。最初のものは、アリストテレスとトマスにおける質料と形相についてであり、最後のものは、トマス時代を背景として *De regimine principum* を研究している。両者の間に、トマス思想の種々の側面を論じる11の論文があり、あるものは——たとえば形而上学の対象についての論文は——現代思想の中で、もっと具体的にこの場合は分析哲学との対決として、問題を論じ、トマスにはついでにふれるだけであるが、あるものは、たとえば「トマス・アクィナスにおける意味と価値」についての F.-J. von Rintelen の論文は、始終トマス自身を中心に問題論じている。

イタリアの *Rivista di filosofia neo-scholastica* もまた *Studi su San Tommaso d'Aquino e la fortuna del suo pensiero* という特集号を刊行した。それは、1099ページの巾広い論文集であり、寄稿者は明らかに国際的である。収録された論文は31であるが、イタリア語のものが半分を少し上回り、その他は、フランス語とドイツ語が5ずつ、英語は3、スペイン語は1という具合である。終わりの方に30ページに亘って、各論文の要約があるが、それはすべてフランス語である。この特集号は、単に過ぎ去ってしまったものを記念して祝うことだけを目的としているのではなく、ある論文は、現代人のためにも重大な教訓を含んでいる歴史的な事情を、この機会に、明らかにしようとするのであり、多くの論文は、著者の生きた思想の起源に溯り、その元来の力を今日の世界の中で再現しようとするのである。このような意図で集められた研究は、歴史上の諸問題と体系的な諸問題について論じているが、同一の論文の中で両種の問題にふれられることがよくあるので、編集者は、この観点からの区分を諦め、もっと一般的な仕方で三つのグループを分けただけである。トマス

思想とその源泉との関係を扱う第一のグループは、三つの論文しか含んでいないが、二番目のグループは、トマス思想の種々の側面を論じる21の論文を含んでいる。また最後のグループは、後世に対するトマスの影響を問題にする8の論文を含んでいる。その中には“Der Wandel des Freiheitsverständnisses von Thomas von Aquin zur frühen Neuzeit”というリーゼンフーバー師の論文が見いだされる。一般的に、この論文集の寄稿者の中には国際的に著名な多くの学者の名前が見いだされており、たとえば McInerny, Nédoncelle, de Finance, A. Dempf, C. Fabro, Geiger, Mondin, van Steenberghen, von Rietelen, Verbeke というような研究家が寄稿している。最後の Verbeke は Kluxen の論文集にドイツ語で発表したものをここでフランス語で発表している。

ポルトガルの *Revista portuguesa de Filosofia* も特集号を刊行しているが、それは、トマスとボナヴェントゥラについてであり、前のものほど広くはなく、編集方針については何の説明もない。356ページのこの特集号には12の論文が収録されているが、最初の9論文はトマスについてであって、十番目はボナヴェントゥラとトマスについて、また、最後の二つはもっぱらボナヴェントゥラについてである。それに、トマスに関する二つの研究ノートとボナヴェントゥラに関する一つが加わっている。だから、全体的に言えば、この論文集は主にトマスについてであって、ボナヴェントゥラのことを少しだけ取り扱っている。ほとんどのものはポルトガル語であるが、フランス語の論文は二つ、スペイン語とイタリア語は一つずつその中に見いだされる。“Pluridimensionalidade do Conceito de Liberdade” というリーゼンフーバー師のものはポルトガル語である。特に興味深く読んだものとしては J. de Finance 師の“Sens de l’Objectivisme moral chez Saint Thomas”を挙げることができる。Van Steenberghen は“Le processus in infinitum en saint Thomas”について書いているが、その中で使っている文献をよく読んでみると、再検討の必要があるというふうに思われた。

以上扱ってきたすべてのものよりもはるかに広い論文集として、ただいま発行中の *Tommaso d’Aquino nel suo settimo centenario. Atti del Congresso Internazionale* というのがある。ローマ・ナポリの国際大会の前に536ページの一巻が刊行されたが、特に重要なものと見なされていた論文を収録したこの一巻は、間もなく品切れ

になって、多くの大会参加者さえそれを受けることができなかった。今度刊行中である *Atti* の中には前のものについては何もいわれていないが、前の一巻に発表になったいくつかの論文がまた既刊の *Atti* に表われているので、残りのものも同じように表われるに違いない。したがってここでは既刊の *Atti* だけについて述べることにする。現時点までは4巻しか刊行されていないが、全巻にはローマ・ナポリ大会の参加者が送った800ぐらいの論文が収録されるはずである。それは、今日の哲学的または神学的研究の動向を知るためには大いに参考になるに違いないが、他の論文集の場合よりも各論文についての批評は重大な問題になるであろう。というのは、この場合の編集者は、取捨選択の可能性をもたず、批評を加えることもできず、ただ自発的に送られてきたものの順序だけを決めて、いかなるものをも収録せざるをえなかったからである。大会の言語は、イタリア語、フランス語、英語、ドイツ語とスペイン語であったが、論文はこの五ヶ国語のものであって、それは印刷上の多くの困難を意味したようであり、残念なことには少なからざる誤字が目につく。順序は、内容だけに従っており、大会のプログラムのとおりである。

さて、471ページの第一巻は、まず、教皇パウロ六世とイタリア共和国大統領レオネ閣下のはじめ、大会のあいだなされた荘厳な演説が収録されており、巻末にはかなり細かい大会議事記録がある。しかしこの一巻の大部分はやはり研究者の論文であり、具体的には、トマス思想の源泉についての研究がここに収録されている。最初に、思想史の中にトマスを位置づけようとするもっと一般的な論文が五つあり、第一のものは、13世紀の危機に対するトマスを扱う van Steenberghen のものであって、五つ目は、ハイデッガーの問題から出発し、形而上学的思考と神信仰について述べる Dondeyne のものである。それに続いて、アリストテレスに関するものが七つ、プラトンやアウグスティヌスに関するものが六つ、アラビア思想に関するものが十、「ラテン系の源泉」に関するものが五つの論文がある。最後のグループには、トマスの源泉としてのダマスコの聖ヨハネについての研究も含まれている。数としては、アラビア思想に関するものが一番多く、その分野のもっとも著名な専門家の名前が目立っている。その一人である M. Cruz-Hernández は、つねに同士の対話に終止符を打つべきであることを強く強調している。というのは、ラテン世界の伝統について何の知識も関心ももたないアラビア思想の専門家も、アラビア思

想の専門家たちのいうことを完全に無視するラテン中世の研究家もいるからであるという。同じグループの中には、トマスとアヴィケナナについての千阪氏の論文が見いだされる。

第二巻は、645ページに及び、「思想史におけるトマス」の第二部を収録している。具体的には、その時代におけるトマスと後世におけるトマスについてであるが、まず、トマスとその時代に関しては17の発表があり、次に「トミズムの発展」に関する28のそれが続き、最後に「今日におけるトマス」についての19のそれがある。最初のグループに関しては別に何の問題も感じないが、後の二グループの場合は、なぜそこに入れられたか分からないものがある。たとえば「イタリアにおけるトミズムの発展」という部分に「トマスとジェンティレにおける神の内在性と超越性」というのがあるが、それは、実際、ジェンティレの考えを述べ、最後にトマスの立場からの、著者の批評を加えるものだけなのであって、トミズムの発展についての研究とは思えない。もちろん各論文のために適した場所を見付けるのは極めて困難なことであったに違いなく、編集者はこの困難を一般的に告白している。

第三巻からは体系的研究の刊行が始まるわけであるが、488ページのこの一巻には「神と救い」に関する多くのものが収められている。最初のものとしては、「トマスによる神の不可解さ」についての K. Rahner の論文がある。それは大会の総会の時に発表されるはずであったが、ついに師が出席できなかつたため取りやめになった。第三巻と第四巻に関して内容の明確な分類は不可能であるが、おおざっぱに言うと、第三巻に収録されている研究は、神学の基礎的な問題を論じるのであり、もっと特殊な問題についてのものは、次の第四巻のために残された。

557ページの第四巻のタイトルは、「神学の諸問題」であり、最初の研究は、「聖書解釈者としてのトマスの今日性」についてである。それは、著名な聖書学者 S. Lyonnet のもので、パウロにおける文字と霊との関係についてのトマスの解釈を調べている。そして、師の考えでは、この問題を正しく解釈するためには、トマスのいっていることが重要である。最後に「これは一例にすぎない」と明記してその論文を終わっている。また Nicolas とか Schillebeeckx とかというような著名な研究家のものもこの第四巻に含まれているが、最後にもう一つの研究にふれてこの紹介を終わりたい。それは、「トマスとアジアの諸知恵」についての O. Lacombe のもの

である。思想的対話が本当に深い次元に行なわれるものでなければならないということ 강조했다上、かれは、インドの文化の研究に捧げてきた45年間の経験に基づいて、アジアの知恵とのよき対話者として、トマスのキリスト教的知恵を非常に高く評価している。かれによれば、現代の多くの「哲学」よりもトマスの思想は、この対話のためにずっと適している。そしてそれは、ちょうど、トマスのキリスト教的知恵の中に、混同されることなしに、形而上学と神学的知恵と靈的生活の生きた知恵とが調和的に総合されているからである。

最後に、*Veritas et Sapientia. En el VII Centenario de Sto. Tomás de Aquino* (Ediciones de la Universidad de Navarra, Pamplona 1975) という論文集もあるということ を指摘しておきたい。実物をまだ見ていないので、その内容について述べないことにしたが、その中によい研究が収録されているそうである。